

巨大建築に抗議する

神代雄一郎

建築界の三猿

互いにごく親しいけれど、めったなことでは電話をかけて、相手の生活を乱したくない、そんな気持をもちあってつきあっている小説家から、ある夜ふけ、突然電話があった。だいぶん興奮しているらしく、話の内容はいま行ってきた劇場についてなのだが、こういうのだった。わたしはNHKホールの、ギリシャ古典劇に招待された。席は一般の劇場でいえば、ロイヤルボックスに相当するような位置からちょっとはずれたところだった。それなのに、はじめから終りまで、舞台のセリフがちっとも聞こえなかった。いったいこんなことってあるのか。建築家にはそんなことができないのか。劇場の音響とはそんなにむつかしいのか。わたしがとっさの返答にこまっている間で、小説家のほうもやや落着いたとみえて、こう笑わせてきた。もっともセリフが聞こえても、どうせギリシャ語じゃあ、わたしにはわからないのだけれど……、しかしあんまりひどすぎないか。このへんでわたしのほうもやっと平常に頭が回転はじめ、いやあ……あんまり建築家を買いかぶりなさんなよ。何しろかの有名な丹下健三さんの設計した代々木の国立屋内競技場にも、プールの見えない観客席があるほどだから……、と答えたものだ。そうなのか、そんなものなんかと合点のいったらしい小説家は、ついでにもうひとつ教えてくれた。そういうえば国立劇場にも舞台の見えない座席がありますよ、大劇場のほうの最前列の両側計2席、と小説家ははっきりいった。こんなにたくさんあるのでは、何かの機会に書かなければいけないとは思っていた。見えない観客席、聞こえない聴衆の席。見える、聞こえる、見ざる聞かざる、もうひとつそろえれば三猿になるのだと、その機会を待っていたらついにやってきた。先日、宮内嘉久さんの著書「少数派建築論」の出版記念会があって、少数派にしてはすいぶんたくさん集まって、例のなあなあの会になってしまったなと思っていたら、途中でマイクの前に立った先輩の文芸評論家はこういったものだ。どうもさっきから見たり聞いたりしていると、建築界は年功序列的で閉鎖的だ。文学のほうだったら、こんな席ではやりあって、とくみあいもあるのだが……というのだった。つまり建築家同志、本当のことをいいあわな

いのである。いえざる、いわざるである。

まことに釣合いのとれない三猿とはなったが、わたしはつねづね、ほんの数人を除けば、建築家の半はヘッポコ文士にも及ばぬ人物ばかりだと思っているし、わたしのやっている建築評論など、とても文芸評論の域には及ばないと考えているから、この小説家の電話、文芸評論家の言葉には、大いにはげました。そこで、建築界のしきたりであるいわざるのおきてを破って、まずは、見えざる聞こえざるのよってくるところを、探ってみよう。

4,000人とは何ごとか

さて、なぜ見えない座席、聞こえない客席ができるのだろうか。規模が大きいから、そういう席ができてしまうのだろうか。わたしはそうは思わない。現代の建築設計技術をもってすれば、この程度の規模で、そんなことが起こるはずがない。それは建築家が、スポーツ施設では観客にスポーツを見せること、コンサート・ホールでは聴衆に音を聞かせること、そのことを第1に考えていない結果だと、わたしは思う。つまり、建築のことを第1に考えていて、人間のことを第1には考えていないからだと思う。そういう姿勢が根底にあるから、小さなものをつくりたがらず、大きなものをつくると、その姿勢が見えない観客席、聞こえない座席として露呈してくるのではないか。

いったい、見えない席、聞こえない席は、その後どう処置されているのだろう。4,000人を入れるNHKホールの、まったく聞こえない席やよく聞こえない席や変に聞こえる席は、どうするのだろう。わたしの質問にこう答えた建築家がいた。神代さん、あれは元来放映用のホールだから、全国のテレビにいい音と、いい映像が伝わればいいんです。客席も放映のための存在で4,000人という大聴衆が拍手するありさまがうつせればいいんです……と。とんでもない話だ。わたしにはこうしてできてしまった席の処置について、ひとつの迷案があるから提言しておこう。信楽あたりで、人間の大きさのタヌキならぬサル、それも眼をおさえたり耳をおさえたりしている猿を焼いて、見えない席には眼をおさえた猿、聞こえない席には耳をおさえた猿を、座らせておくのである。それがいやなら、このところ美術界で流行の等身大の蠟人

間や石こう人間、それが耳や眼をカッポジッテいるのを、座席にかけさせておくのである。スーパー・リアリズムの芸術家諸君、銀座の画廊で等身大人間をみせるよりは、このほうがよっぽど効果的ですよ。とにかく、見えない席・聞こえない席は、建築家の非人間的姿勢が巨大なものをつくることで露呈したのだから、それは人間的な芸術家の仕事で補ってもらわねばならん。蠟の人間も焼物の猿も結構ではないか。ひところ建築と美術の協力といわれたものは、最近こういう関係にすりかわっているではないか。あとでも述べることになると思うが、いま新宿副都心にできつつある超高層ビル——あの非人間的姿を補うために、多くの芸術タレントが協力して、共倒れしているではないか。

なぜ、実力のほどが知れてしまう、自身の非人間性が暴露してしまうほど巨大な仕事に、建築家は手を出すのか。こういう質問をすると、建築家諸君はきまってこうお答になる。たくさんかかえている所員を、とにかく養わなければならないから……と。この答は、建築家が自らの社会的責任を放棄したことになる。自分だけが、自分の縛りだけがよければいいといっているのだから。わたしはNHKホールの、聞こえない席をつくった建築家を知らない。これは所詮わからないだろう。たくさんの建築家が関係し、互いになあなあと、かばいあっているのだから。そういうことではませ得るのだから、巨大な仕事はいい、ということになる。だがいったい、野外劇場ならともかく、ちゃんと屋根のある劇場で、4,000人を収容するものは、世界にいくつあるだろう。この規模は一国に対応するものではなく、国際的な場合に、もしその巨大さが必要であり、意味があれば、あってもいいといったものだろう。公共放送と銘うって、日本人だから高い聴取料を巻き上げている、NHKが持つ規模ではなかろう。

現にNHKのNはNIPPONのNであり、国際的・世界的存在ではない。たとえ国際的に有名な指揮者や楽団を呼びよせようと、NHKは日本だけに存在する不思議な公共放送であることに変わりはない。いったいどのくらいの規模のものが、いまの日本にとっては必要なのか、大切なのか。そんなことは施主のほうも建築家のほうも、ちっとも考えていない。一方では、わたしたちの住宅が、生活最小限を割っているという状況の中で、他方では非人間的な超高層ビル・巨大ホールが建っていく。これは文字どおり、民主主義ではなく資本主義・企業主義である。民主の社会ではなく、中央集権の社会である。4,000人を入れる大ホール、しかもホワイエや廊下面積は極端に切りつめられて幕間のコミュニケーションも行なえない、客席には聞こえない席が混っている。いったいこれは何ごとだ、といいたいところだが、まさに巨大主義の化物だから、言葉も通じまい。

最近のいい建築・いやな建築

見えない席や聞こえない席は、それが本当は建築家の非人間の姿勢のあらわれであっても、まだ何とか、視角や音響に対する設計の技術的ミスに見えたり、そうしたミスとして解決処理できるからいい。だがわたしがここで本当に問題にしたいのは、ミスらしくごまかすことのできない、デザインそのものに、最近きわめて未熟・非人間的なものがでてきて、それがいずれも、これまた巨大な建築においてであるということである。

最近、新宿副都心にできたり、できつつある2,3本の超高層ビルを、諸君はどう思っていられるだろうか。わたしには、とても好感がもてない。第1,近づき、眺めても、対話が生まれてこないのである。眺めまわして、これならまだ、最初に建った京王プラザのほうがいいなと思う。なぜ、最初に建ったものよりも、2番目、3番目と、よくなつて行かないのだろう。そうなるのが、あたりまえだと思うが。

これまた最近完成した、石貼りの最高裁判所の建築も、わたしがそこに近づくと、シャクにさわってくる建物である。これについては多くの方がたが雑誌で語っているが、どれもこれも巧妙なレトリックで、ほめているのかけなしているのかよくわからない。だがそれは、わたしも文筆を業とする人間として、ほめられない建物に乗せられてしまった時よく使った手であるから、わたしはどしゃくにさわらなくても、概して不評ということなのだろう。わたしはシャクにさわるのは、この建物についてよくいわれる、社会的な中央集権的権威主義云々というのでもなければ、またこれを設計した建築家の人格についてでもない。どの建築でもいい、それにわたしは近づいて行くとき、どこかで何らかの対話がはじまつてくるものなのだが、それがないから、シャクにさわるのである。この、自然に発生してくるべき建築と人間との間の対話が阻害される原因は、少なくとも、あるいはとりわけ、建物の外皮を構成している材料のあつかいにあるようだ。

これは最高裁ばかりでなく、新宿の超高層ビルの場合でも同じことだ。前者でいえば石の使い方、後者でいえば、金属やガラスのパネルということになる。その外皮の、どこをどうすればいいかということにならうが、それは技術的なこともからんでくるから、むつかしい。わたしとしては、逆にいい仕事をあげて、対比的に述べ、納得していただく以外に手はない。最近完成の超高層ビルでいえば、丸の内の東京海上ビルがいい。霞が関ビルができて以来、日本の超高層ビルの歴史にもかなりの時間的厚みができるが、その中で東京海上ビルは抜群に秀れている。いろいろの点で抜群だが、いま問題にしている外皮でいえば、焼ものであるタ

イルを使ったのがいい。色も質もよく、割付けもいい。日本の風土によくあつてゐるし、陽光のあたり具合で、さまざまに心に染みる対応をしてくる。またそれが、ガラス面との間にもつ深さ、つまり表皮の凹凸の具合もいい。

これに対して、新宿の3角ビルは、表面の凹凸が浅いから、リズムが構成されない。もうひとつのほうの青いガラスは、せいぜい「青い背広に心も軽く」といった、うらぶれた流行歌を思い出させるぐらゐ安手だし、露出したタスキ掛けの骨組は、シカゴの裏街の新しい安物ビルを思わせる。シカゴがどんな街なのか、この設計者はご存じなのだろうか。黒ずんだ古いシカゴ派の建物と、ミースのガラスの作品はあるけれど、その他の新建築はガラクタの安ものばかりで、いまでも、なるほどギャングの街だなと思う。もっとも東京の超高層も、どちらかといえば丸の内のものは東京海上ビルを筆頭に品格があり、新宿のものは商業的である。ジュクには、たしかにシカゴと一脈通ずる人工的風土があるのかもしれない。

最高裁に對比させるのに何がいいかとなると、小さなものなら、最近完成し、ここ数年最高傑作といつていゝ倉敷のアイビースクエアの、そのレンガや石のあつかいもあれば、昨秋完成した四国高松の瀬戸内海歴史民俗資料館の石、そこから近い丸亀の武道館の木や石の使い方をあげることができる。だがこれらは、規模や地域社会とのつながり方の問題として後にあつかうことにして、ここではそれこそ完成したばかりの、東京・飯倉の交差点に建つノア・ビルを対比させよう。

ノア・ビルの設計は、白井晟一+竹中工務店ということらしいが、わたしがこれから指摘する部分は白井晟一さんによるところと思う。このビル、いろいろな論議を呼ばうが、とにかく材料のあつかい方は抜群、人をなかせるようなうまさである。外側、3階までのレンガの使い方やインド砂岩の配し方——レンガはコバを割って、凹凸はげしく貼り積み、眼どおりを赤いインド砂岩の帶でしめている。1階内部ショールーム壁の寒水石のたたき具合、8階社長室まわりの、淡色インド砂岩の剥離面をつかった壁まわり——これは見ていただかないとわかるまいが、材料の人間に對して持つ性質などおわかりない学生や若い建築家たちに、ぜひぜひ一見をお推めする。

これに比べると、最高裁の石は、なぜ石を使ったのか、まるでわからない。あんなに薄く切り、その薄さをだらしなく見せ、金属目地を使つたりしている。石というものを、人間と対応関係のあるものとしては見ずに、ただ物質として觀念で使つているように思える。人間感覚とはさしさわらないで、石は近代建築理論で代表されるような觀念で、切り貼られているように見える。それは

新宿の超高層ビルのパネルでもいえることで、ものはここでは、人が見たり触れたりして感ずるものとして使われているのではなく、設計者の觀念に従つてあつかわれる物質なのである。したがつて、建物は無表情になり、ただ巨大なばかりとなる。

建築家層にできた亀裂

ところで、読者はすでに気づいていられるかもしれないが、最近の、特に巨大な建築で、めだつていい建築と、いやな建築の差が、きわめて大きくなり、少々極端ないかたをすれば、建築家のデザインが、人間と対話するものと、無表情なものに、2極化してきたようにわたしは思うのである。この2極化の原因は何か。ちょっとここで、面白く考えだされるのは、先にいい建築としてあげたものの設計者、東京海上ビルの前川国男さん、ノア・ビルの白井晟一さん、アイビースクエアの浦辺鎮太郎さん、丸亀武道館の大江宏さん、瀬戸内海歴史民俗資料館の山本忠司さん、これらの方がたがすべて50歳以上の年輩だということである。

これに対して、新宿超高層ビルや最高裁の設計者や担当者は、どうやら50歳に達していないようだ。わたしはいま52歳、50歳でわけられたふたつの建築家層の、ほぼ中間年齢であり、両方に対しても理解の持てる(?)戦中派として考えさせられるのは、現在の50歳ラインが、実は戦前に人間形成を終っている戦前派と、戦後に人間形成をおえた戦後派を分けるラインであるということだ。このラインが、ものでつくり得る建築家と、觀念でつくる建築家を、分けているのではなかろうか。それは手仕事に基礎をおいた教育と、機械全面肯定の教育が尾をひいてのことであるかもしれない。あるいはまた、この年齢に基づけば、建築家が代表作をつくる平均年齢は、詩人や作曲家とは極端に違つて遅く、60歳あたりであるという。そういう根拠によって説明され得るものかもしれない。ひとことでいってしまえば、人間と対話し、人間に何かをうたいかけ、うつたえかけるような建築藝術をつくり得るのは、成熟した人間にとって、はじめて可能なのだということだ。ここでは、早熟の天才もあり得ないし、設計を組織化することだけではどうにもならないものがある、ということなのだろう。人間的成熟・未成熟、経験の厚さ・薄さ、戦前派・戦後派、そんなふたつの建築家層のこれまでではそれほど目立たなかった割れ目が、巨大建築をつくることで、あるいは建築の巨大化が進行するなかで、はっきりした亀裂に生長し、ついには2極化現象を起こしそうにさえみえてきた。それは巨大建築のなかで、いいものといやなものが明確化していくというかたちと、いやなものの多い巨大建築と、いい小さなものとの間に、デザイン優劣の格差がうんと大きくなるという傾向

とを、合わせ持つて露呈してきているようだ。しかし概していえば、巨大なものは駄目で、小さなものにいいものがある。しかも面白いことには、いやなものをつくった建築家たちに、一向に巨大建築への反省がないのに対して、いいものをつくった建築家たちが、巨大なものに疑問を感じたり、提言・進言していることである。超高層の東京海上ビルで、抜群のできを示した前川國男さんが、「建築」誌6月号の対談でボツリとこういっている。「とにかく『巨大なもの』というものに対しては、非常に何というかこのごろひとつ胸につかえるものがあるのですね」と。そして、アイビースクエアの傑作をつくった浦辺鎮太郎さんは、もっとはつきりと、「最近の建築工事をかえりみて」という特集を行なった「建築雑誌」6月号で提言する。「最近の建築工事を日本国内に限って、しかも1960年より1973年までに限定して見れば、それは異常な高度成長に対応したブーム状況下で行なわれたものであって、その本質はスケール・メリット——大きいことはよいことだ——のどん欲な追求にあった。建築が自らの原則でそうなったというよりも機械文明下の競争社会がそうさせたのであり、またそれに抜目なく対応した建築界が目先を効かせてやったことである」と。これはこの論文のほんの冒頭部分で、多くを引けないのが残念なほど、これを読めば建築家が巨大建築へ小走りに向かった姿と、それへの問いつめがあざやかである。わたしが先に問題にしたオリンピック屋内プールは1964年、それに浦辺さんのあげる万博が1970年、そしてNHKホール・新宿超高層ビルと結びつなげてくれれば、建築家の巨大なものへの溺れ方も、よくわかるうというものだ。見えない座席・聞こえない客席と、巨大建築のデザインの凋落とは、無関係ではなかったわけである。根は同じところにあったのである。

どんな規模が大切か

わたしは、浦辺さんの指摘する1960年以来の巨大化への傾向、特に最近の無表情な巨大建築に抗議しているわけだが、ではさて、どのくらいの規模の建築が、いまの日本にとってもっとも大切であり、必要であるのか。4,000人とは何ごとかと、わたしは先に書いたが、それはそこに聞こえない席があるからばかりではなく、それよりも、4,000人を収容する巨大ホールの存在に、社会的意義が希薄だと考えるからであり、現に不特定の4,000人が何度も同じ音楽を聞き、劇をみようとも、互いに顔を見知り、親しみあえるような事態は起こってこないのである。集会用の、人が集まるための、ギャザリングのための建築は、どの程度の規模がいまもっとも効果的であるのか。それが、巨大建築に抗議するこの評論の結論になるはずである。

過去7年間、コミュニティの実態調査をやってきたわたしにとって、答はしごく簡単である。人間は集まって暮し、生きて行く。いったいどんな組織をもって、どのくらいの規模で集まり住めば、人びとはいっしょにやって行こうという気持を持ちやすいのか。ここでは、規模だけについていえば、200戸・1,000人という答がでている。コミュニティの適正規模である。自然発生的コミュニティでも都市コミュニティでもいい。コミュニティがしっかりしていれば、それが基礎になって、住民運動も市民運動も起りやすく、それはまた大きく発展して行ける。アメリカを悪くいう人が多いが、そこではコミュニティがしっかりしているから、小さな不買運動も、大きなニクソン弾劾も、根づよく展開する。だが、コミュニティが崩壊してしまった日本では、世の中がこんなに変てこになっているのに、政府はおろか田中首相ひとりひきすりおろすことができない。

わたしはいま、日本にコミュニティを復活し、再建し、強化することが、最大の急務だと考えている。人びとの心を結び合わせ、共同体意識を生長させること、そのためにはどんな規模のどんな表情の建築が役立つか。ギャザリングのための建物であれば、それは500席ぐらいを持つものだろう。立席もぎゅうぎゅうにして1,000人入ればいい。コミュニティの住人全員が集まることはめったにないので、その半分の500の席があればいい。4,000人の、音も聞こえぬホールを集権的にひとつくるよりは、500人のホールを地域的にばらして8つくるほうが、どれだけ社会のためになるか。500席の、特定の地域に根ざしたホールでは、人びとは互いに顔見知りであり、話しあい、コミュニケーションを深めることができる。また、舞台と客席の関係も親密になり、見物ではなく参加という気持になる。

だが現在、建築にも建築家にも、地域社会と結びついて、しかも適正な規模を持ったものや、それをつくる人は、きわめて少ない。住宅作品を除けば、建築家のやっている仕事は、すべて根なしで、大きすぎるといいきってはばかりないほどだ。最後にここでも、わたしがどんな作品、どんな規模にいま好感をよせているか実例をあげておくと、地域社会とのつながりでは、先の浦辺さんの倉敷のアイビースクエア、山本さんの讃岐の瀬戸内海歴史民俗資料館、鬼頭梓さんの日野の図書館などが目立って思い当たる。槇文彦さんの代官山アパートもいい。前川さんが、かつて岡山に古レンガを使ってつくった、小さな美術館もよかった。東京・世田谷の資料館も、規模がいい。ギャザリングのホールの規模としては、前川さんの紀伊国屋ホール、芦原義信さんの岩波ホール、槇さんが金沢区総合庁舎内につくったホールなどが、いまます眼の前に浮んでくる。